

トロントの日本語学校とヘリテージ（日本文化）の保持

倉 田 和 四 生

はじめに

- (1) トロント日系コミュニティの構造
 - (2) トロントの日本語学校
 - (3) 日本語学校の学生と学習環境
 - (4) 日本文化と接触
 - (5) 日系人としてのアイデンティティ
- むすび

は じ め に

移民は母国文化から異なった文化への変容を経験する存在である。移民（マイノリティ）の一世は「母国文化」を移住先に持ち込んでエスニックコミュニティを創り、ここを拠点としながら、次第に「移住先の文化」を受入れ同化融合していく。しかしいずれにしても、一世は終生二つの文化に生きている人間である。

二世もまた二つの文化に生きている人間である。ただ一世の場合には母国文化が基底にあって「移住先の文化」がその上に重ねられているのに対して、二世の場合には、むしろ、基底にあるものは「移住先の文化」であって、その上に「父母の国の文化」が重ねられている。両者は同じ二重性といっても基層的文化と上層文化の関係が逆に成っている。

これが三世になると、「構造的同化」が完了し祖父母の国の文化は遠い異国の文化となる¹⁾。すなわち移民の文化変容は三代において完成するといえよう。

しかしこのようなステップはあくまでも基本的な図式であって、実際には様々な条件によって変

容するものである。その条件を客観的なものと主観的なものに分けることが出来よう。

客観的な条件としては移住先の社会が移民をどの程度受入れるかという点が重要である。移民に寛容で何らの差別も示さず、むしろ優遇することもあるし、逆に移民として受入れながら、厳しい差別や排斥をする場合もある。戦前、戦中、戦後にわたって、アメリカ合衆国やカナダでみられた日系人や東洋系に対して見られた例は、不幸にして後者の厳しい差別排斥であった。このような不幸な条件のもとでは二世でさえ正当な市民として受入れられないので、その社会の文化を自己の文化として同一化することが困難となる。

次に主観的条件としては個々の移民がどの程度、移住先の文化を受入れ、これに融合しようとする態度をとり実践するかである。そしてその際に戦略的手段となるものは移住先の「言語」である。言語は文化の中核をなし、文化を統合し、文化の意味を表現する手段である。言語を失なった文化はその純粋性を失なっていく。そこで一世（の一部）は母国語の保持に熱心に取り組んでいる。

ここで取扱うカナダのトロントにおいても日本語の保持に努力しているのは主に一世達である。一世や二世達がどのようにして日本語を保持しようとしているかについて検討してみよう。

〔1〕 トロント日系コミュニティの構造

バンクーバーを中心に B.C. 州に居住していた日系人は大太平洋戦争の勃発によって自由を拘束さ

1) ただし三世のアイデンティティについては異なった意見が併存している。一つは三世の方が「沈黙した2世」よりも祖父母の国の文化に強い関心を示すというものであり、他はそうでないという見解である。このような現象は戦争中のアメリカやカナダの場合のように、日系人に対する強い弾圧があった場合に生まれるものであろう。

れ、道路キャンプ、内陸収容所、砂糖大根栽培プロジェクト、補償収容所へと送られ、最終的にはロッキーより東の全カナダに強制移動させられた。その中でも大都市のモントリオールとトロントに多数の人々が集中した。

東部に移住した人達はまず住宅を探し、職につくことが先決問題であった。しかし当時は偏見や差別が強く、容易に見つけることは出来なかった。そこで最初はどのようなところでも貸してくれる家に住み、雇ってくれる仕事ならどんな仕事にでもついて、ただひたすら働いた。そして次第に生活に余裕がみられるように成ると、よりよい住宅、よりよい仕事を求めるように成った。今日ではトロントの日系人は他のエスニック・グループに比べ見おとりしない生活を営んでいる。

(1) 日系コミュニティの構造（四つの機能の対応組織）

日系コミュニティの構造をさぐるために、日系人がどのような組織を作って活動しているのかについて四つの機能的パラダイムを適用して整理してみよう²⁾。

1) 適応機能

戦前の B.C. 州時代のように、日系人の同業者の組合は存在しないし、また労働組合も消費組合も存在していない。ほとんどの日系人はカナダの企業に就職している。また自営業の人達も日系の同業者が組合をつくって共通の利益を守るといったことは行っていない。わずかに「新企会」（戦後の新移住者の経営者の親睦組織）のような経営者の親睦組織があり、研修会などを企画しているにすぎない。また新移住者は加盟店に割引セールを実施させている程度である。

要するに経済的な分野に関しては、日系カナダ人の同業組合や消費組合はなく、カナダ社会に同化しているといえよう。

2) 目標達成

日系人が市民らしい生活を営むという目標を実現するための組織としては「日系市民協会」

（JCCA）のトロント支部とその「1 世部」があげられる。この組織は1947年、JCCD の発展的解消に伴って組織されたものであるが、日系人の人権を守り市民権の擁護のために努力した³⁾。また総移動によって破壊されたエスニック・タイを再建し、日系人間の接触を求めようとする要求に応えようと努めた。

全カナダの JCCA は1950年代には財政難に陥ったため活動出来なくなった⁴⁾。トロントにおいては1964年に日系文化会館（JCCC）が完成し、ここを拠点に文化活動が行なわれるように成ると、JCCA は次第に名目的な存在となっていた。現在、JCCA トロント支部は総会も開かれず、役員選挙も行なわれていないまま、役員は長期留任している。

これに対して「1 世部」は毎月定例の役員会を開き、「社交部」「研究部」が活動を行なっている。

3) 統合

統合機能を担う組織としては、宗教団体、モミジ・ヘルスケア・ソサイエティ、福祉委員会、県人会、新移住者協会などをあげることが出来よう。

① 宗教団体

トロントには大別して4種類の日系の宗教団体が存在する。第1は仏教会、第2は日系合同教会、第3は聖公会、第4はその他のものである。

1. 仏教会

仏教系には本願寺系、日蓮宗系などがあるが、その中で最も規模の大きいのは仏教会である。仏教会には約800人の会員がいるといわれているが、この会は世代別、性別によく組織されている。活動部門としては理事会のもとに宗教、会計、福祉、コントローラー、財政、社会奉仕、文化、出版、特別企画、野球部がある。その中の文化部にはカラオケクラブ、囲碁、将棋クラブ、生花クラブ、茶道クラブ、俳句クラブ、日本舞踊クラブなども含まれている。

したがって仏教会は単に信仰の問題だけでなく、文化、娯楽についても重要な機能を果たしているといえよう。

2) 詳しくは、拙稿「カナダにおける日系社会の構造と変化」関西学院大学社会学部紀要47号 昭和58年12月

3) トロント日系市民協会一世部『35年史』昭和58年

4) Ken Adach, *The Enemy That Never Was*, 1976, p.357.

2. 日系合同教会

キリスト教会には日系合同教会、聖公会、セブンスデー・アドベンチスト教会、めぐみキリスト教会などがあるが、その中でも日系合同教会が最も大きい。1983年現在で1世部と2世部合せて659名の会員をかかえている。日本語による礼拝をもつ1世部と英語による2世部とがあり、年に数回、合同の礼拝をもっている。

② モミジ・ヘルスケア・ソサイエティ

この会が高齢化していく日系1世のために福祉サービスを行なう福祉組織である。1976年、有志（主に2世の婦人会員）の要望にもとづいて日系市民協会の中の委員会として発足したが、1979年に福祉法人となった。

現在、レジデンシャル・ケアとして「グリーンビュー・ロッジ」とナーシング・ケアの「キャッスルビュー・ウッチウッド・タワー」の2ヶ所に奉仕活動を行なっている。そのメンバーは入居者の家族の外、教会など各方面のボランティアが入っている。

③ 新移住者協会

新移住者協会は第2次大戦後に移住した人達の組織である。この協会は9つの団体とクラブの協議会である。それは「日加学園」「国語教室」、「文化伝統クラブ」、「フリーランス・クラブ」、「野球クラブ」、「J.C. スターズ」、「スキークラブ」、「民謡クラブ」、「ゴルフ・クラブ」である。活動としては、①ラジオの日本語放送、②伝統文化の紹介、③ニューズレターの発行、④文庫、⑤友愛基金、⑥スポーツ教室、⑦スプリング・フェスティバル、⑧講演会である。これによって新移住者間の交流と親睦をはかっている。

この外に「福祉委員会」（これは主にトロント日系市民協会の1世部が実際の運営に当たっている）と「県人会」がある。

4) 型の維持

型の維持の機能を果すものとしては、日本語学校、日系文化会館および各種のクラブが存在している。

トロントにおける日系人のための制度化された日本語学校は「トロント日本語学校」、「ヘリテージ日本語学校」、「国語教室」、「日加学園」の四つである。

「トロント日本語学校」は1949年に仏教会のもとに発足したもので、他の三つの日本語学校もすべてこれを母体として発展したものである。

「トロント日本語学校」と「ヘリテージ日本語学校」は家庭で主に日本語を常用しない二世の家庭の子弟、すなわち、主に三・四世を対象とする学校である。したがって日本語を完全に外国語として学ぶ人達に日本語を教えている。

これに対して「国語教室」と「日加学園」は新移住者の子弟、すなわち家庭で日本語がかなり使われている家庭の日系2世を対象に日本語が教えられている。

次に、日系文化会館における各種の文化教養活動は日系人にとって「型の維持と緊張処理」の機能を果している。

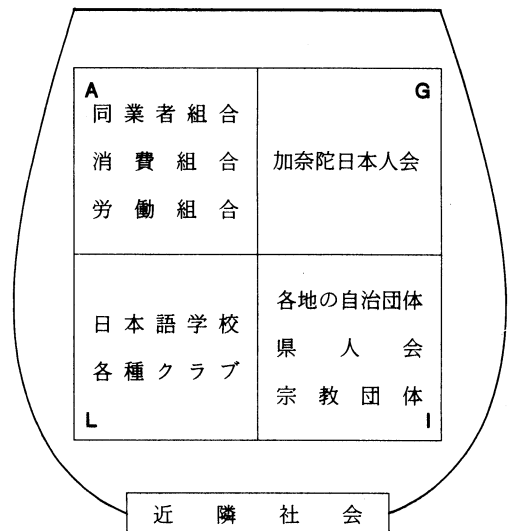


図1 戦前(BC)の日系社会

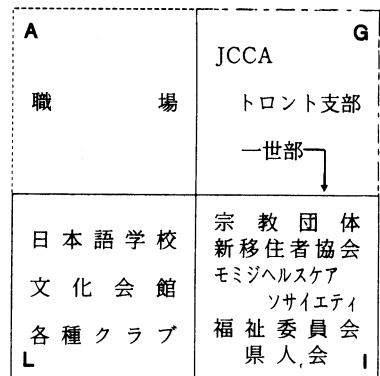


図2 トロントの日系社会

さらに各種のクラブ活動もまたそのような機能を果している。

(2) トロント日系コミュニティの特徴

次にトロント日系社会の特徴について論じてみよう。

1) 分散居住と近隣社会の消滅

すでに述べたように、日系人は同化を早め排斥をなくすため、集中して居住することを避け、カナダ全土に分散することを強制された。さらに市の内部においても目立たないように分散して居住した⁵⁾。したがってメトロ・トロントにおいても日系人は全域に分散しており、日系人が著しく集住した場所はない。

2) 日系人の経営者組織がない。

戦前の B.C. 州においては日系人の同業者組織があり、消費組合が存在したが、今日、トロントにおいては日系企業が連合して利益を擁護するための組織もなければ、日系人のための消費組合も存在しない。

この点から見ると、日系社会はカナダの経済に融け込んでいるといえよう。

3) 非政治化現象

戦後、日系人の非政治化現象はカナダ全体にみられるものである。戦前には日系人は選挙権を与えられず、さらに戦争によって市民権さえ停止させられたわけであるから、その傷は深く、いまだに完全に癒え切っていないといえよう。とも角、平穏に生きることがなによりも重要なことであって、自己の要求を積極的に主張することを自己抑制しているのであろう。連邦議会にもオンタリオ州議会にも日系の議員は存在しない。この点はアメリカ合衆国の日系人と大きく異なる点である。

日系人が政治の世界に活躍していないのは、戦前、戦中の苛酷な取扱いを経験したことによって、自己抑制のよくきいた「静かなカナダ人」になり切ったということの外に、日系人の絶対数が少ない上に、分散居住しているため、日系人を基礎票として選挙に打って出ることが不可能に近いことが、その理由となっているものと考えられる。

4) 解体化

経済的に結びつく契機を失ない、さらに、非政治化がすすんだ為に、日系人が全体として大きくまとまることが少なく、むしろアソシエーション別や世代別に分散、遊離していく傾向にある。

日系の宗教団体、日本語学校、各種クラブなどが他の日系団体と深いかわりなく存在している。さらに戦前の 1・2 世と戦後の移住者との間にはあまり親密な関係が存在しない。

5) 文化団体化・親睦団体化

日系人としての経済活動の消滅や政治的機能の衰退にともなって、日系人の団体は文化団体化、親睦団体化していく。この傾向の中で「宗教団体」と「日本語学校」が重要な役割を占めている。そしてこれらの集団はいずれも潜在機能として社交と親睦の機能を備えている。

(3) 近隣社会の消滅がもたらす問題

近隣社会の消滅はいくつかの点でトロント日系コミュニティに問題を生み出している。

まず第 1 は、先に述べたように、エスニック・コミュニティはすぐれた地域社会であり、それがエスニックの伝統文化を保持するための砦を成している。したがって近隣社会が存在しないということは、存在する場合に比べて伝統文化の保持が困難となる。

第 2 に、エスニックの近隣社会が存在すると、そこでは母国語が使用されるため、自然に母国語が保持されるが、近隣社会が存在しないため母国語の保持が困難となる。近隣社会は母国語の砦でもある。

第 3 に、日系人がメトロトロントに分散居住しているため、日本語学校への通学が長距離となり、通学のために親の負担が大きくなる。本来、小学校の低学年では学校は学区の中央におかれ、出来るだけ通学距離を短くすることが建前とされている。例えばバリーの近隣住区論によれば小学校低学年の通学範囲は 2 分の 1 マイル内とされている⁶⁾。この点から考えると、トロントにおいては日本語学校への通学はきわめて困難な条件のも

5) Ken Adach, *The Enemy That Never Was*, 1976, p.356.

6) C.A. ベリー 倉田和四生訳『近隣住区論』鹿島出版会

とにある。メトロトロントに広く分散居住しているため、各自が徒歩で通学することは不可能であり、すべて父母によって車で送り迎えせざるを得ない。そのため親は土曜日の午前中、子供の日本語教育のために奉仕する。実際、大多数の父母は日本語学校の授業の運営に直接・間接参加している。またこのような通学の送り迎えからして、日本語学校の授業をウィーク・ディにすることは困難であろう⁷⁾。

第4に、このような広域への分散居住は日本語学校だけでなく、宗数団体においてもある種の対応を余儀なくされている。例えば日系合同教会の1世部においては、メトロ・トロント全域に分散した信者を一挙に掌握することが困難なため、12の地区に分け、地区毎に長老をおき、地区単位に連絡をとり、集会をもつようにしている。また同様に仏教会の婦人会においても東・西・中央と地区割をし、それぞれに活動している。

〔2〕 トロントの日本語学校

(1) トロントの日本語学校の形成と発展

戦前の日系人の95%はB.C.州に住んでいたが、第2次大戦中に東部に移動を余儀なくされた。そこで日系人は全カナダに分散したがことに大都市のモントリオールとトロントに多数の人が集中して住むことに成った。現在、トロントには2万人前後の日系人が住んでいるといわれている。

トロント市が日系人の受入れ制限を解除したのは1946年であるが、戦後の1949年、日系差別がまだ残っているなかで日本語教育が始められた。最初の出発は仏教会(当時Huron Street)内の教育部日本語科という形で日本語学校が発足した。これは戦後、カナダで最初の日本語学校の出発点であった。

一年後に「トロント日本語学校」として独立することに決定し、維持団体を組織して学校の経営に当らせることに成った。

1964年には日系文化会館内に分校を設置し「トロント日本語学校第二校」(スカボロー校=現在の

ヘリテージ校)が発足した。

1965年にはオルディ公立学校に移転した。

1966年には第三校として「エトビコ校」を設立したが学生数が少なく、1970年に閉鎖した。

1974年、日本総領事館および日本商工会の要請で、トロント日本語学校の第三校としてトロント駐在員の子弟の為に「日本語補習授業校」を設立した。

1976年、トロント日本語学校内に「国語教室」を設け商社関係の子弟および戦後移住者の子弟を対象に日本の小学校と同程度の国語を教えることに成ったが、同年11月にはこの教室が独立して「国語教室」となった。

1978年、国語教室から分離独立して「日加学園」が発足した。

したがって、今日では制度化された日本語学校としては、①トロント日本語学校、②ヘリテージ日本語学校、③国語教室、④日加学園、⑤日本語補習授業校が存在している⁸⁾。

子弟の世代からみると、①と②は日系の3・4世が中心で、2世や日系以外の子弟も若干含まれている。これに対して③④は戦後の新移住者の子弟である日系2世が主で、若干、日系3・4世や日系以外の子弟も含まれている。⑤は日本人である日本商社の駐在員の子弟が主で、研究員の子弟その他も含まれている。

財政的にみると、各校の授業料の外に①と②では領事館を通じて国際交流基金の援助を受けている。また③と④は領事館分室を通じて海外移住事業団の補助を受けている。さらに②と③は1981年に教育委員会のヘリテージ校としての援助を受けている。

(2) 学級運営の現状

1) トロント日本語学校

現在、幼稚園1クラス、小学校1年～8年生の8クラス、成人クラス1クラスの合計10クラス123名の生徒をかかえている。

トロント日本語学校は家庭で英語を話している3・4世を対象にしている。そこで生徒にとって

7) ただしB.C.州のバンクーバーの共立日本語学校ではウィークディの授業も行なわれている。

8) この外に日系文化会館、トロント大学東南アジア学科等に日本語のプログラムがある。

日本語は全く外国語として学習するのであるから、家庭で主に日本語を使う2世（国語教室、日加学園）の場合に比べ学習活動は困難な条件のもとにある。そこでこの学校では「話し言葉」の修得に主眼を置いている。教科書は現在、日本のものを用いているが、トロントの実情に合わない点もあるので、この学校に適合したものを作成するように検討している。幸い経験豊かな教師陣の献身的な努力によって効率的な授業がなされているので困難な条件の割にはすぐれた成果をあげている。

この学校の特徴は最も良い伝統を持ち、強力な維持会によって経営されており、強固な財政的基盤に立って各種のスカラシップが用意されており、生徒の勉強心をそそっている。また最終学年は日本への研修旅行を実施している。

クラスは毎土曜日の9時から12時までの3時間で、テキストは日本のものを使用している。授業料は年間90ドルである。

2) ヘリテージ日本語学校

ヘリテージ日本語学校は先に述べたように、1970年トロント日本語学校の分校としてスカボロにおいて発足したが、1981年独立してオンタリオ州のヘリテージ校となった。

現在、ここでは幼稚園のクラスと1年生から7年生までのクラス、さらに成人クラス2クラスの計10クラス、合計170名の生徒をかかえている。

この学校もトロント日本語学校と同じく、家庭で主に英語を話している3・4世を対象にして授業がなされている。

この学校は81年からオンタリオ州のヘリテージ・プログラムに加入しており、教員の給与の一部や教室の使用料などが州によって支給されている。この学校でも日本の中学校と姉妹校関係を結び交換訪問を始めた。

テキストはハワイの日本語学校で使用しているものを利用している。授業料は年間90ドルである。

3) 国語教室

1976年、トロント日本語学校の中に、新移住者の子弟のための教室として出発したが、同年11月には独立して「国語教室」となった。この学校も1981年、トロント教育委員会のヘリテージ校となり援助を受けている。

ここにはレベル1から10まで、181名の学生が在籍している。

授業料は月9ドルである。

この学校の特徴は学校の運営について父兄がいろいろな面で参加していることがあげられる。幼稚園には父兄がアシスタントとして先生を助けしており、その他、当番を決めて学校運営に参加している。また夏期休み中に、子供の為のキャンプを実施している。

4) 日加学園

日加学園は1978年、国語教室から分離独立したものである。この学校も国語教室と同様、主として新移住者の子弟を対象としている。

ここでは1年から9年までと成人クラスが1クラスで計10クラス、合計105名が在籍している。テキストは日本のものを用いている。学習の目標は日本語学習の三次元、聞く、書く、話すの三機能をバランスよく修得させることである。

日加学園にも多くの父兄が学校に来ているが、学校の運営に参加することは少なく、むしろ父兄が学校で待期している時間を使って父兄対象に実用的なテーマについて講座を企画実施している。

(3) 日本語学校の問題点

1) 時間数

トロントの四つの日本語学校の問題点の第1は時間数が少なすぎる点である。これらの学校はいずれも週一回、土曜日の午前中、9時から12時までの3時間にすぎない。外国語として学ぶのに週一回3時間では十分に上達することは困難であろう。これは3・4世を主たる対象とする「トロント日本語学校」と「ヘリテージ日本語学校」だけでなく、主として2世を対象とする「国語教室」や「日加学園」の場合も同様である。外国語に熟達するためにはもっと時間数を増す必要がある。勿論、このことは教師にも学生にもよく自覚されているが、現実に学習時間を増やすことは困難である。その理由は生徒達がカナダの公立学校に通っている上に、日本語学校に通学することはそれ自体、過重な負担であると言うだけでなく、日系人の近隣社会がなく、広くメトロトロントに分散しているところから、日本語学校に生徒達だけで徒歩通学することは不可能で、通学するためには

父兄に自動車で送迎してもらうことが必要となる。そこで父兄が休みの土曜日しか開校出来ないというのが実状である。

ただし時間数の増大やウィークディの開校は困難ではあるが、不可能というわけではない。1949年にトロントで日本語学校が発足した当時は週三回開校されていたし、バンクーバーではウィークディに開校している。

さらに理想的なことを言えば、ユークレニアンが主張しているように、パイリンガルの語学教育として公立学校で日系人には英語と日本語が学習されたならばすぐれた成果をあげることが出来るであろう⁹⁾。

2) 父兄の負担の増大

すでに述べたように、生徒を日本語学校に通わせるために父兄は大きな負担を負うことになる。大部分の父兄は子弟を学校に送って行くとそのまま学校に残り、授業の終わるのを待ち、終わってから子供を連れて家に帰るので、日本語学校から遠いところに住んでいる人は、土曜日一日を子供の日本語教育に費すことに成る。このようにして子弟に日本語を学ばせるために父兄が大きな負担を負わされている。

しかしこのような負担はたま別の「機能」を果していることに注目する必要がある。子弟の授業に拘束されている父兄は、学校毎にそのあり方は違っているが、その間の時間を有効に利用するため、何等かの形で、学校運営に参加したり、講義に参加している。そしてこのような活動が教師や父兄間の交流を密にし日系人間の関係を密なものにしている。すなわち子弟の教育は日系人の重要な交際・交流の場になっている。

3) ヘリテージ・プログラムへの参加

1971年10月8日、ツルドー首相の声明によってカナダはマルチ・カルチュアリズムの政策をとることに成った¹⁰⁾。従って戦争中、排斥された経験をもつ日系人も日本の伝統文化を保持することが認められただけでなく、むしろ奨励することに成

った。民族文化のなかで核心をなすものは言語であるから、母国語の保持がまず奨励の対象になる。そこでヘリテージ・プログラムとしているいろいろの民族の母国語の学習が援助を受けることに成っている。

四つの日本語学校のうち、このプログラムに乗って援助を受けているのは「ヘリテージ日本語学校」と「国語教室」の二つであって、他の二校はプログラムに参加していない。したがって日本語学校として、このヘリテージ・プログラムに対して意見が分かれている。

プログラムに参加しない学校の不参加の理由としては次の諸点が指摘される。

- ① プログラムによる援助はどの程度まで続くのかについて不安がある。急に打切になるとその時に困る¹¹⁾。
- ②それほど大きな援助でもない割に申請手続が繁雑である。またなにかと制約されるのは困る。自由な教育を続けたい。
- ③ 日本語学校は日本から援助を受けているので、カナダ政府からも併せて援助を受けることに躊躇する。

〔3〕 日本学校の生徒の学習環境

次に1982年から1983年にかけて、トロントの四つの日本語学校（および合同教会日曜学校）の児童を対象に行ったアンケート調査をもとに、これらの日本語を学んでいる2世や3世の児童の「学習環境」や「日本文化への接触度」、「日系人としてのアイデンティティ」について考察してみよう。

(1) 児童の性格

アンケート調査の対象はトロントにある四つの日本語学校および日系合同教会の日曜学校（ほとんどの児童は日本語を学習していない）の児童であるが、まずその性格について検討しておこう。

9) Jean Burnet, The Policy of Multiculturalism Within a Bilingual Framework : An Interpretation in Aaron Wolfgang ed., *Education of Immigrant Students*, pp. 207-208.

10) Prime Minister Trudeau, Formal Statement of Government Policy, House of Commons Speech, Canada 1971, pp. 8545-8546., Howard Palmer ed., *Immigration and the Rise of Multiculturalism*, 1975, pp. 115-116.

11) 内閣が自由党から保守党に変わった後、ヘリテージプログラムが維持されるかどうか心配される。

① 年令

高年令が多く、ヘリテージ校と国語教室が中間で、日加学園が最も若い。

まず年令別でみると、学校によりかなりの相異がみられる。トロント日本語学校と日曜学校では

表 1 児童の年令

学校 出生年度	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	日系合同教会 日曜学校
1965年以前 (17才以上)	3 (14.3)				11(34.4)
1966～69年 (13才～16才)	17(80.9)	14(58.3)	14(58.3)	6 (30)	20(62.5)
1970年以降 (12才以下)	1 (4.8)	10(41.7)	10(41.7)	14(70)	1 (3.1)

② 性別

みると、ヘリテージ校では女子が多く、トロント日本語学校と日曜学校では男子が多い。

性別についてみると、全体では女子が52.9%でやや多く、男子は47.1%となっている。学校別に

表 2 児童の性別

学校 性別	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	日系合同教会 日曜学校	合計
男	12(57.1)	5 (20.8)	12(50.0)	10(50)	18(56.3)	57 (47.1)
女	9 (42.9)	19(79.2)	12(50.0)	10(50)	14(43.8)	64 (52.9)

③ カナダの公立学校の学年

ト日本語学校は高学年が多く、他は低学年が多い。

公立学校の学年別にみると、日曜学校とトロン

表 3 公立学校の学年

	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	日系合同教会 日曜学校	合計
5年生まで		2 (8.3)	1 (4.2)	3 (15)		6
6年～7年生		8 (33.3)	9 (37.5)	9 (45)	1 (3.1)	27
8年～9年生	12(57.1)	12(50.0)	11(45.8)	7 (35)	7 (21.9)	49
10年以上	8 (38.1)	2 (8.3)	3 (12.5)	1 (5)	22(68.8)	36
不 明	1 (4.8)				2 (6.3)	3
合 計	21	24	24	20	32	121

④ 出生地

世であるのに対して、国語教室と日加学園は戦後の新移住者の2世が多く、日本生まれも20～25%いる。日曜学校はすべてカナダ生まれである。

出生地別にみると、トロント日本語学校とヘリテージ校は、例外をのぞきカナダ生まれの3・4

表 4 出 生 地

学校 性別	トロント 日本語学校*	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	日系合同教会 日曜学校	合計
日 本	1 (4.8)	1 (4.2)	5 (20.8)	5 (25)		12
カナダ	18(85.7)	23(95.8)	17(70.8)	14(70)	32(100)	104
その他	1 (4.8)		2 (8.3)	1 (5)		4

※ 不明 1

⑤ 世代

多く、1世も2割ほどいる。日曜学校はすべて
トロント日本語学校とヘリテージ校には3・4 3・4世である。
世が圧倒的に多く、国語教室と日加学園には2世

表5 日系の世代別

	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	日系合同教会 日曜学校	合計
1 世	1 (4.8)	1 (4.2)	5 (20.8)	5 (25)		12
2 世	3 (14.3)	4 (16.7)	18(75.0)	14(70)		39
3・4世	17(80.9)	19(79.2)	1 (4.2)	1 (5)	32(100)	70

⑥ 日本語学校への通学期間

日本語学校」に長い人が多く、「日加学園」もこ
日本語学校への通学期間でみると、「トロント れについて長い。

表6 通学期間

	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	合 計
6 カ月～1 年未満		1 (4.2)	2 (8.3)		3
1 年～3 年未満	2 (9.5)	3 (12.5)	2 (8.3)	3 (15)	10
3 年～5 年未満		6 (25.0)	5 (20.8)	4 (20)	15
2 年以上	19(90.4)	14(58.3)	15(62.5)	13(65)	61

(2) 日本語学習の環境

① 父の日本語を話す能力

ヘリテージ校でも8割近くが流暢に話せると答え
新移住者の子弟が多い国語教室と日加学園では ている。しかし日曜学校では流暢に話せるのは3
ほとんどの父が流暢に話せるのは当然であるが、 割で6割の人がいくらか話せるにすぎない。

表7 父の日本語を話す能力

日本語	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	日系合同教会 日曜学校	合計
流 暢	12(57.1)	19(79.2)	23(95.8)	19(95)	10(31.3)	83
いくらか	8 (38.1)	3 (12.5)			19(59.4)	30
ほとんどできない			1 (4.2)		2 (6.3)	3
全く出来ない		2 (8.3)		1 (5)	1 (3.1)	4
無 回 答	1 (4.8)					1

② 母の日本語を話す能力

に話すのは当然であるが、「トロント日本語学校」
「国語教室」と「日加学園」の母はすべて流暢 と「ヘリテージ校」では6割しか流暢に話せない。

表8 母の日本語を話す能力

	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	日系合同教会 日曜学校	合計
流 暢	14(66.7)	14(58.3)	23(95.8)	20(100)	9 (28.1)	80
いくらか	6 (28.6)	4 (16.7)	1 (4.2)		14(43.8)	25
ほとんどできない	1 (4.8)	3 (12.5)			6 (18.8)	10
全く出来ない		3 (12.5)			3 (9.4)	6

③ 家庭で使用される言葉
「英語」だけを話す家庭は「ヘリテージ校」と
「トロント日本語学校」に多い。「日本語」だけ
の使用は「日加学園」が最も多く、「国語教室」

がこれについている。しかしいずれの学校でも 6
割以上は日本語と英語をミックスして用いてい
る。

表9 家庭で話される言葉

	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	日系合同教会 日曜学校	合計
英 語	4 (19.0)	8 (33.3)	2 (8.3)		24(75.0)	38
日 本 語		1 (4.2)	5 (20.8)	7 (35)		13
英語と日本語	17(80.9)	15(62.5)	17(70.8)	13(65)	8 (25.0)	70

④ 誰のすすめで日本語学校に来たか
両親の影響力が最も強いのは「日加学園」で次
いで「国語教室」が多い。自分で選んだ人は「ト
ロント日本語学校」と「ヘリテージ校」に多い。

表10 日本語学校へ通学した動機

	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	合 計
両 親	14(66.6)	17(70.8)	20(83.3)	20(100)	71
自 分 で	6 (28.6)	6 (25.0)	4 (16.7)		16
そ の 他	1 (4.7)	1 (4.2)			2

⑤ 日本語を学ぶ理由
日本に修学旅行などでいくことが多いのは「ヘ
リテージ校」で、日本研究が多いのは「国語教室」、
外国語の一つとして学ぶ人が多いのは「トロント
日本語学校」と「ヘリテージ校」である。

表11 日本語を学ぶ理由

	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	合 計
日本に行くため	5 (23.8)	9 (37.5)	5 (20.8)	3 (15)	22
日本を研究するため		2 (8.3)	4 (16.7)	2 (10)	8
一つの外国語として	8 (38.1)	9 (37.5)	7 (29.2)	6 (30)	30
特に理由なし	5 (23.8)	2 (8.3)	3 (12.5)	8 (40)	18
その他	3 (14.3)	2 (8.3)	5 (20.8)	1 (5)	11

⑥ 日本語を家庭でどの位の勉強するか
日本語の勉強時間が最も長いのは「国語教室」
で、次に「日加学園」、第三が「トロント日本語
学校」で、最も少ないのが「ヘリテージ校」であ
る。

表12 家庭学習の時間

	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	合 計
30分内	10(47.6)	14(58.3)	2 (8.3)	3 (15)	29
30分～1時間未満	6 (28.6)	6 (25.0)	8 (33.3)	10(50)	30
1時間～2時間未満	2 (9.5)	1 (4.2)	9 (37.5)	5 (25)	17
2時間以上	2 (9.5)	1 (4.2)	5 (20.8)	1 (5)	9
しない	1 (4.8)	2 (8.4)		1 (5)	4

⑦ 両親の手助け

両親の手助けが多いのは「トロント日本語学校」と「国語教室」であるが、いくらか助けるが多いのは「日加学園」と「トロント日本語学校」である。助けないの多いのは「ヘリテージ校」である。

表13 日本語学習に対する両親の助け

	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	合計
よく助ける	5 (23.8)	2 (8.3)	4 (16.7)	2 (10)	13
いくらか助ける	11(52.3)	5 (20.8)	11(45.8)	13(65)	40
ほんの少し	5 (23.8)	11(45.8)	7 (29.2)	4 (20)	27
全く助けない		3 (12.5)	2 (8.3)	1 (5)	6
無 回 答		3 (12.5)			3

〔4〕 日本文化との接触

先に述べたような「性格」をもち、「学習環境」の中にあるトロントの日本語学校の児童は果してどの位日本の伝統文化に接触を持っているか、次にこの問題に触れてみよう。

① ラジオの日本語放送

新移住者協会は週一回（30分）の日本語FMラジオ放送を行なっている。この放送は日本の歌謡曲をディスク・ジョッキー風に流す番組であるが、この番組をどの位聞いているかをみると、「トロント日本語学校」と「ヘリテージ校」では聞く人は25%で「聞かない人」が7割を超える。「国語教室」と「日加学園」では聞く人が30%ほどで、聞かない人が70%ほどである。四校とも聞く人は少ない。

表14 FMラジオの日本語放送を聞くか

	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	日曜学校
よく聞く	4 (19.0)	3 (12.5)	1 (4.2)		
時々聞く		2 (8.3)	3 (12.5)	5 (25)	1 (3.1)
たまに聞く	1 (4.8)	1 (4.2)	3 (12.5)	2 (10)	1 (3.1)
全く聞かない	15(71.4)	18(75.0)	17(70.8)	13(65)	30(93.8)
無 回 答	1 (4.8)				

② テレビの日本語プログラム

TVの日本語プログラム（日本語と英語で主に日本のことを紹介する番組）を見るのは「日加学園」と「国語教室」が多く、次いで「ヘリテージ校」に多い。さらにその次は「日曜学校」で、見ないのが最も多いのは「トロント日本語学校」である。日系合同教会の日曜学校の生徒は日本語がわからないにもかかわらず、日本文化を紹介するこの番組は「トロント日本語学校」の児童よりもよく見ている。

表15 TV放映の日本語プログラムを見るか

	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	日系合同教会 日曜学校	合計
よく見る	2 (9.5)	1 (4.2)	4 (16.7)	5 (25)		12
時々見る	2 (9.5)	9 (37.5)	11(45.8)	8 (40)	5 (15.6)	35
ほんのたまに	1 (4.8)	3 (12.5)	4 (16.7)	3 (15)	13(40.6)	24
見ない	15(71.4)	11(45.8)	4 (16.7)	4 (20)	14(43.8)	48
無回答	1 (4.8)		1 (4.2)			2

③ 日本語の雑誌・新聞を読むか

日本語の雑誌・新聞を「よく読む」のは「国語教室」と「日加学園」に多く、「トロント日本語

学校」と「ヘリテージ日本語学校」では「時々」読む人が多い。「日曜学校」ではほとんど読まない。

表16 日本語の雑誌や新聞を読むか

	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	日系合同教会 日曜学校	合計
よく読む		1 (4.2)	9 (37.5)	7 (35)		17
時々	8 (38.1)	9 (37.5)	1 (4.2)	2 (10)	3 (9.4)	23
ほんのたまに	3 (14.3)	3 (12.5)	2 (8.3)	2 (10)		10
全く読まない	10(47.6)	11(45.8)	11(45.8)	8 (40)	29(90.6)	69
無回答			1 (4.2)	1 (5)		2

④ 日系文化会館へ

日系文化会館は日系人の活動の拠点として作られたものであるが、各種の集会や伝統文化に関する催がなされている。

この会館にこの1年間に4回以上訪ねたことのある人は「国語教室」が最も多く、75%にも達し

ている。これは「国語教室」関係の父兄の中に新移民者協会の活動メンバーが多いところから、父兄の関係する催に家族として参加するためであろう。これについて多いのは「トロント日本語学校」の52.4%である。「日加学園」が最も少ない。

表17 日系文化会館へ行ったことがあるか

	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	日系合同教会 日曜学校	合計
1回行った	2 (9.5)	4 (16.6)	1 (4.2)	1 (5)	6 (18.8)	14
2～3回	5 (23.8)	3 (12.5)	2 (8.3)	8 (40)	7 (21.9)	25
4～5回	6 (28.6)	2 (8.3)	1 (4.2)	1 (5)	3 (9.4)	13
5回以上	5 (23.8)	8 (33.3)	17(70.8)	2 (10)	10(31.3)	42
行ったことがない	3 (14.3)	6 (25.0)	3 (12.5)	6 (30)	6 (18.8)	24
無回答		1 (4.2)		2 (10)		3

⑤ 日本の伝統文化とのかかわり方

日本の伝統文化とのかかわりについてみると、「見るだけ」が多いのは「トロント日本語学校」である。次に「自分でやる」が多いのは「日加学

園」と「日曜学校」で、「どちらもしない」のが多いのは「ヘリテージ校」である。これによると日本語を話せることと関係なく、日本文化への関心が深いと思われる。

表18 日本の伝統文化とのかかわり

	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	日系合同教会 日曜学校	合計
見るだけ	69(3.28)	52(2.16)	62(2.57)	40(2.0)	48 ¹⁾ (1.5) 2 ²⁾ (2.5)	271
自分でやる	33(1.57)	31(1.29)	30(1.25)	35(1.75)	55 ¹⁾ (1.7) 2 ²⁾ (2.8)	184
どちらもない	1人	6人	3人		13人	

1) 48, 55を32人で割ったもの。2) 45, 55を32人－13人で割ったもの。

⑥ 日本食

日本食をどの程度食べているか¹²⁾についてみると、「米」はどこもほとんど毎日のように食べて

いる。3・4世も2世の場合にもあまり大きな違いはみられない。

次に「日本茶」については「国語教室」が最高

で、「日曜学校」が最も少ないが、その差は大きくない。すなわち平均的によく飲まれている。

しかし「つけもの」に成ると、最高の「国語教室」と最低の「日曜学校」の差が大きくなっている。

さらに「味噌汁」になると最高の「日加学園」と最低の「ヘリテージ校」との差がもっと大きくなっている。

すなわち日本食の中でも「お米」は1世の家庭だけでなく、2・3世の家庭でもよく食べられているが、「つけ物」と「味噌汁」では1世の家庭と2世の家庭ではかなりの差があることがわかる。

表19 日本食をどの程度食べるか

	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	日系合同教会 日曜学校	最高・最低 の差
米	4.76	4.37	4.75	4.65	4.31	0.45
味噌汁	2.04	1.33	3.75	4.05	1.50	2.72
つけもの	2.57	2.83	3.87	3.10	1.80	2.00
日本茶	2.85	3.00	3.50	2.95	2.25	1.25

毎日ー5、週1回ー3、月に1・2回ー2、めったに食べないー1、として平均値を出したもの。

〔5〕 日系人としてのアイデンティティ

(1) 状況の変化と日系人のアイデンティ

戦前から戦中・戦後にかけての差別と排斥によってカナダの日系人は日系人としてのアイデンティティが危機に瀕した。生きのびる為には日系人であることをつとめて否定しようとした人もあった。しかしその後の状況の変化にともなって、日系人としての自信と誇りを再び取り戻して来たものと考えられる。

その1つは日本が国際社会の中で、経済大国として地位を確立して来るにつれて、次第に日本人としての自信を高めて来たことが、日系人にも影響を与え、失ないかけていた日系人としての誇りを再び取り戻すようになった。

第二の要因は日系人の目ざましい社会的進出である。日系移民は教育熱心であったから2世や3世が高い教育を受けることによって医師や弁護士などの専門職に就いて高い評価を得て来たことである。このような事実が日系人自身にも自信と誇を生み出した。

第三は、沈黙する二世とは違って三世達が日系人であることに誇りを持ち、戦争中、政府が日系人に対しておこなった弾圧を、不当な人種差別であると糾弾し補償要求の運動を始めたことである。このような動きはアメリカに始まったが、カ

ナダでもバンクーバーやトロントに生れた。「トロントの相談会」も三世が活発に動いている。

第四の要因はカナダ社会自体が英国系とフランス系との葛藤から、バイカルチュアリズムを余儀なくされて来たが、1971年以降、さらに進めて、マルチカルチュアリズムの政策を取ることに成ったため、エスニック・グループの伝統文化の維持高揚がむしろ奨励されるようになったことにある。これにもとづいて日系人も日本の伝統文化を積極的に高揚する活動がなされている。トロントのキャラバンには日系人も積極的に参加している。また先に述べたように、それぞれの民族の母国語の学習についてのヘリテージ・プログラムには四つの日本語学校のうち二校が参加し援助を受けている。

(2) 児童の友人関係

エスニック・アイデンティティを知るために、友人の中にどの位、そのエスニックの人が含まれているかによって判断するやり方がなされている¹³⁾。この方法にしたがって日本語学校および日曜学校の児童の友人にどの程度まで日系人の児童が含まれているかについてみると、友人5人のなかに日系人の児童が含まれている割合が多いのは

12) Jeffrey G. Reitz, *The Survival of Ethnic Groups*, 1980, pp. 109—118.

戦後移住者の二世である「日加学園」が最も多く、次いで「国語教室」であるが、第三位は「日曜学校」である。「トロント日本語学校」と「ヘリテージ校」は日曜学校よりかなり少ない。日曜学校の

児童で日系人を友人に選ぶ人が多いのは彼等は日本語を学んでいないが、日系人の教会であるため、教会の日曜学校の友人（日系）が多いためであろう。

表20 親友5人のうち日系人は何人いるか

日系の友人	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	日系合同教会 日曜学校	合計
1人	5 (23.8)	6 (25.0)	8 (33.3)	2 (10)	5 (15.6)	26
2～3人	5 (23.8)	8 (33.3)	6 (25.0)	9 (45)	10(31.3)	38
4人			5 (20.8)	1 (5)	3 (9.4)	9
5人	4 (19.0)	1 (4.2)	1 (4.2)	5 (25)	4 (12.5)	15
なし	5 (23.8)	8 (33.3)	4 (16.7)	2 (10)	6 (18.8)	25
無記入	2 (9.5)	1 (4.2)		1 (5)	4 (12.5)	8
計	21	24	24	20	32	121

(3) 日本に親類はいるか

日本の親類についてみると、当然のことながら、戦後移住の2世の場合には多く、3・4世の場合

には比較的少なくなっている。この場合には、日本語学校に行っている人にくらべ、日曜学校の生徒は日本に親類がいる人が少ない。

表21 日本に親類はいるか

	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	日系合同教会 日曜学校	合計
1人	3 (14.3)	2 (8.30)			8 (25.0)	13
2～3人	3 (14.3)	5 (20.8)	1 (4.2)	2 (10)	6 (18.8)	17
4～5人	7 (33.3)	7 (29.2)	12(50.0)	4 (20)		30
6人以上	5 (23.8)	3 (12.5)	10(41.7)	14(70)		32
いない	2 (9.5)	7 (29.2)			11(34.4)	20
無回答	1 (4.8)		1 (4.2)		7 (21.9)	9

(4) 児童の日本訪問

児童の日本訪問についてみると、「日加学園」と「国語教室」が多く、双方とも95%の人が日本を訪れている。これについて「トロント日本語学校」は6割、「ヘリテージ校」で5割の人が日本を訪れている。これに比べると「日曜学校」では9割の人が行っていない。日本語の学習と日本訪

問には相関関係が深い。

「日加学園」と「国語教室」では夏休み中に子供だけで親の国元に帰し、日本の学校に在学させることがかなり行なわれている。またトロント日本語学校とヘリテージ校では最終学年に日本研修旅行をやっている。

表22 日本に行ったことがあるか

	トロント 日本語学校	ヘリテージ 日本語学校	国語教室	日加学園	日系合同教会 日曜学校	合計
1回	2 (9.5)	7 (29.2)	10(41.7)	5 (25)	3 (9.4)	27
2～3回	7 (33.3)	2 (8.3)	6 (25.0)	9 (45)		24
4回以上	3 (14.3)		6 (25.0)	5 (25)		14
行ったことなし	8 (38.1)	13(54.2)	1 (4.2)	1 (5)	29(90.6)	52
日本から来た	1 (4.8)	2 (8.3)	1 (4.2)			4

(5) 日系人であること

日系人であることをどのように受止めているかについてみると、「誇りに思う」は「日加学園」が最も多く95%，第2は「トロント日本語学校」で81%，第3位は「国語教室」で70%である。ヘ

リテージ校と日曜学校では4割台で，無関心の方が多くなっている。この点からみると「トロント日本語学校」が高いのは，この児童の年令が高いことと，日本との交流が盛んであることと関係があると推定される。

表23 日系人としての誇り

日系人あること	トロント日本語学校	ヘリテージ日本語学校	国語教室	日加学園	日系合同教会日曜学校*	合計
誇に思う	17(80.9)	11(45.8)	17(70.8)	19(95)	14(43.8)	78
無関心	4(19.0)	12(50.0)	7(29.2)	1(5)	17(53.1)	41
うらめしく思う		1(4.2)				1
計	21	24	24	20	31	120

※ 不明 1

(6) アイデンティティの保持

日系人としてのアイデンティティの保持についてみると、「トロント日本語学校」，「ヘリテージ校」，「日加学園」が保持する人が7割を越えているが，「国語教室」も7割に近く，差はあまり大きくない。4校とも「保持」が多く，「必要なし」はきわめて少ない。

「日曜学校」は59.4%といくらか低いが「必要なし」は極めて少ない。これからして日本語学校の児童の日系としてのアイデンティティは予想以上に高いといえよう。

次に「国語教室」の方が「トロント日本語学校」

や「ヘリテージ校」よりも低いのは奇異に感じられるところである。「国語教室」と「日加学園」の方に低学年が多いところから，質問の意味を理解し得なかった者がいたのではないかと推定される。これが「必要なし」に現われているのではないか。

このようにみると，日本語学校（4校）の間には日系アイデンティティの保持についてほとんど実質的な差異はないと考えられる。

成人についてみると，成人の場合には例外的なものを除いて殆んどの人がアイデンティテを保持すると考えており，「必要なし」という答はない。

表24 日系人としてのアイデンティティ

アイデンティティ	トロント日本語学校	ヘリテージ日本語学校*	国語教室*	日加学園*	日系合同教会日曜学校	合計
保持する	15(71.4)	17(77.3)	16(69.6)	13(76.5)	19(59.4)	80
無関心	6(28.6)	5(22.7)	4(17.4)	3(17.6)	11(34.4)	29
必要なし			3(13.0)	1(5.9)	2(6.3)	6

※ 無回答を除く

いま世代別にみると，戦後の1世（96.9%），2世の大人（88.5%）が高いが，2世と3・4世は逆転し，3・4世の児童が69.4%，2世の児童

が62.5%となり，最も低いのが日曜学校の児童である。

表25 日系人としてのアイデンティティ（世代別）

アイデンティティ	戦後1世	2世大人*	2世児童*	3世児童*	3・4世日曜学校
保持する	31(96.9)	23(95.8)	34(73.9)	27(73.0)	19(59.4)
無関心	1(3.1)	1(4.2)	8(17.4)	10(27.0)	11(34.4)
必要なし			4(8.7)		2(6.3)

※ 無回答を除く

む す び

(1) 日本語学校の機能

トロントでは日系社会が、もはや、近隣社会として存在せず、広域に分散しているので、日系人はカナダ社会に同化し易く、逆に日系コミュニティの維持は困難となる。しかし幸いにしてカナダ政府が1971年からマルチカルチュアリズム政策を打出し、民族文化の保持をむしろ奨励するように成ったところから、日系文化の保持も容易となった。言語は文化の中核をなすものであるから、日本文化の保持には日本語の学習が最も重要な基礎をなすものである。トロントにおいては、戦後、最初の日本語学校が発足したが、それは次第に拡充発展して今日四校となった。

近隣社会がなく機能社会化したトロントの日系コミュニティにおいては、日系人が日系人としての自覚をもちながら集まる場の主なもの「日系市民協会の一世部」と「新移住者協会」をのぞけば、日系の「宗教団体」の集会と「日本語学校」の二つであろう。日系文化会館で催される文化活動は日系人のためだけでなく、すべての人達に開かれている。またその他の文化サークルは規模も少く、日系人以外にも開かれているからである。

このように考えると日本語学校は日本語の学習を通して日系社会に日系人としての自覚、すなわちアイデンティティを与えるのに重要な役割を果たしていると言わなければならない。

さらにトロントの日本語学校は日本語の学習という機能にとどまらず、もう一つの重要な機能を果たしていることを見逃してはならない。トロントの日本語学校はコミュニティ・スクールの形をとらず、児童は広くメトロトロントに分散しているから、通学のため父兄は児童を送り迎えしなければならない。しかも送って来た父兄は授業が終わるまでそのまま学校に残り、その間にさまざまな形で学校の運営に参加したり、他の父母と交流する機会をもっている。このような機会は日系人の父母の親密な関係を育てるのに極めて重要な意味をもっている。

宗教活動には熱心でない人でも子弟の教育には熱心であるから、日本語学校を通して日系人と知

り合い、親しく交わることによって日系人としての自覚を高めることに成る。

すなわち日本語学校は児童に対して日本語の学習と日本への関心を高めるだけでなく、両親に対しても他の日系人とのつながりを強めるとともに日系人としてのアイデンティティを強める働きをもっている。

(2) 日本語学習と日本文化

これまで検討したところから明らかなように、日本語を学んでいる児童も学んでいない日曜学校の生徒の場合にも、日本文化への接触は同様に高い。これは日本文化の国際化がすすむについて日系人以外の人々が日本の伝統文化に興味を示すように成ったことが逆に日系人に日本文化への関心を呼びましている面があると考えられる。

例えば日系文化会館の会員はいまでは日系人以外の人の人が多くなって、あらゆる日系文化のショーには日系人以外の人々が数多く参加している。すなわち日系人のカナダ文化への同化のプロセスを考えると、初めの段階においては、言葉は失なってもなお日本の伝統文化に対する関心は長く保持されている。そしてその次の段階で完全な同化がなされるのであろう。

さらにこの調査によって明らかにされたことは日系人としてのアイデンティティの保持についての肯定的な答えが一世のみならず二世や三・四世についても予想以上に高いということである。これは戦時中の日系人の処遇に対する補償(redress)の要求が高まった状況が反映されているものと考えられる。しかし他方において日系社会が次第に解体に向い、同化が容易になっていく状況のなかで、今後、カナダ日系人のアイデンティティがどのような方向に向うのであろうか興味のある研究課題である。

(その他の参考文献)

- トロント日系市民協会一世代『35年史』昭和58年。
 Thomas R. Berger, *Frangible Freedom, Human Rights and Disent in Canada*, Clarke, Irwin & Company LTD., 1982.
 Barry Broadfoot, *Years of Sorrow, Years of Shame, The Story of the Japanese Canadian in World War II*, Paper Jacks LTD., 1979.

S.D. Clark, *The Developing Canadian Community*, University of Toronto Press, 1971(1962).

Joy Kogawa, *Obasan*, Lester & Orpen Denny LTD., 1981.

The Official Languages of Canada, A National Understanding, Minister of Supply and Services Canada, 1977.

K.G.O'Bryan, J.G. Reitz and O.M. Kuplowska, *Non-Official Languages, A Study in Canadian Multiculturalism*, Minister of Supply and Services Canada, 1976.

Paul Philips, *Regional Disparities*, James Lorimer & Company, Publishers, Toronto, 1982.

John Potter, *The Measure of Canadian Society: Education, Equality, and Opportunity*, Gage Publishing Limited, 1979.

The Cultural Contribution of the Other Ethnic Groups, Report of the Royal Commission on Bilingualism and Biculturalism (4), Minister of Supply and Services Canada, 1976.

Ann Gomer Sunahara, *The Politics of Racism, The Up-rooting of Japanese Canadians During the Second World War*, James Lorimer & Company, Toronto, 1981.

K. Victor Ujimoto and Gordon Hirabayashi, *Visible Minorities and Multiculturalism: Asians in Canada*, Butterworths, Toronto, 1980.

中島和子「カナダ二語教育研究から学ぶもの」『海外子女教育』1979年7月号

中島和子「二言語に触れて育つ子どもの言語力」『海外子女教育』1982年6月

中島和子「バイリンガル理論の新らしい動向」『月刊言語』大修館書店, 1982年12月

中島和子「英語ができる海外子女の誤解④」日本経済新聞, 昭和56年12月2日夕刊

中島和子「
」⑤」日本経済新聞, 昭和56年12月3日夕刊

岡村富美子「在米海外子女の日本語維持と上達(1)」『海外子女教育』1979年7月号

岡村富美子「
」(2)」『海外子女教育』1979年8月号

関口礼子「カナダにおける文化多元主義とトロントにおける日本人日系人の教育」京都大学教育学部比較教育学研究室『教育における文化的同化と多様化』研究記録集Ⅰ

関口礼子「在外日本人家庭とその教育環境」同上書研究記録集Ⅱ

青木朋子「アイデンティティの確立とアイデンティフィケーションのプロセス」同上書 研究記録集Ⅱ

付記 本稿はカナダ・カウンシルのリーサーチ・フエローとして1年間(1982-1983)トロントに滞在して「トロント日系社会の研究」に従事した研究成果の一部である。その際、数多くの方々から温かい支援を受けた。ことにトレント大学のクレアレンス・レドコップ教授(Prof. Clarence Redekop), トロント大学の中島和子教授, 同大学図書館の松岡暉子先生, 日系合同教会の村田牧師, 富田牧師および会員一同, トロント日本語学校の田中学校長, 北村高明さんと水藪さん, ヘリテージ日本語学校, 国語教室, 日加学園の校長先生などの援助に心から謝意を表したい。